

たかはし式三行作文術 【上級編】 論説文用テンプレートの 使い方

1. 商品内容の確認

最初に商品の中身を確認しておきましょう。

テンプレートおよびマニュアルを含む商品一式は「sakubun_advanced_tmpl」というフォルダの中に入っています。

ご使用にあたってはその中の index.html というファイルをブラウザで開いてください。



たかはし式

行作文術

アウトライン作成テンプレート

1行目 は である

2行目 なぜなら だから

3行目 ということは だよ

上級編

[論説文用テンプレート→](#)

[使い方説明書→](#)

※はじめての方はこのテンプレートをお使いください

[論説文WHY文用テンプレート→](#)

[使い方説明書→](#)

[説明文用テンプレート→](#)

[使い方説明書→](#)

[最新のファイル一式をダウンロードする→](#)

そこには上図のように文章のタイプに応じた三つのテンプレートとその説明書へのリンクがあります。

また「最新のファイル一式がダウンロードできる」リンクもあります。商品は随時バージョンアップを行なっております。必要に応じて最新バージョンをダウンロードなさってください。

なお同じものをオンライン上にもご用意しました。OS とブラウザによってはデスクトップ上で開けない場合もあるようです。どうしても開けない方は恐縮ですが、そちらをご利用いただきますようお願いいたします。

https://mirainium.com/sakubun_tmpl_advanced

2、テンプレートの種類について

テンプレートの種類とその使い分けについて説明します。

●論説文用テンプレート

「自分はこう思う」という主張をもつ論説文を書く際にお使いください。またその使い方については「論説文用テンプレート使い方説明書」（今お読みのこの文書です）をご覧ください。

●論説文 WHY 文用テンプレート

「問い」が「WHY（なぜ）」から始まる論説文を書く際にお使いください。「問い」が「WHY（なぜ）」から始まる場合、若干公式が変わってきます。使い方については「論説文 WHY 文用テンプレート使い方説明書」をお読みください。

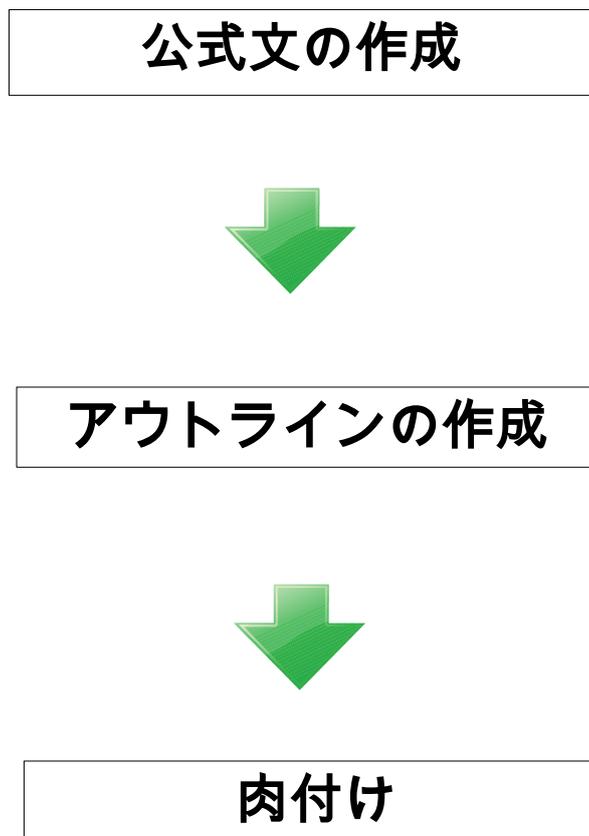
●説明文用テンプレート

同様に説明文を書く際は、説明文用テンプレートとそのマニュアル（使い方説明書）をお使いください。

基本となるのは「論説文用テンプレート」です。はじめての方はまずこちらをマスターしてください。これ以外のテンプレートはみなこれの応用バージョンです。論説文用テンプレートをマスターすれば、それ以外のテンプレートは自然に使えるようになります。

3. 基本的な作業の流れ

作業は次のように3つの段階からなります。



以下、順に説明していきます。

4. 公式文の作成

4-1 下準備

まずは公式文を作成します。

公式文というのは

「AはBである」

「なぜならCだから」

「ということはDだよ」

という三行からなるシンプルな文章です。

ここで作成した公式文がこれからおこなうすべての作業の土台になります。

1行目

A は B である

2行目

なぜなら C だから

3行目

ということは Dだよ

それでは早速、テンプレートを使って公式文を作成してみましょう。

4-2 問いの入力

はじめに問いを入力します。

第一ステップ 問いと答えを明確にして公式文を作成します

▼作文公式

1行目	A: 明らかにしたい問いはなんですか？ 問いを簡潔に記入します。例：喜多方でオススメのラーメン屋といえば？	は
	B: それに対する答えは？ 答えを簡潔に記入します。例：ラーメン『馬賊』だ。	である
2行目	C: その理由は何ですか？ 理由を簡潔に記入します。例：比内地鶏を長時間煮込んで作ったスープが絶妙。癖になる味。全国から客がやってくる。	だからである
3行目	D: まとめると？ まとめとして書きたいこと（課題や感想等）を簡潔に記入します。例：行列ができているが並ぶだけの価値はある！	だよ

← 問いを入力します

ここであなたが問題にしたい問いは何でしょうか？ 何かを書きたい、というからには明らかにしたい何かがあるはずです。またそうである以上、そこには明らかにすべき何らかの疑問があるはずです。

その疑問がここでの問いになります。それを入力してください

例文でいえば

喜多方でおすすめのラーメン屋といえば？

猫をじっと見つめるのは YES、NO？

になります。

その問いを「Xとは何か？」「Xの真偽は？」「Xをするにはどうすればよいのか？」など、文として明確に意味が通るような形にして入力します。

なおこの段階では必要以上に表現に凝る必要はありません。自分で意味が取れればそれで十分です。

また、問いが複数あって、どれを選んだらよいのか判らない場合は、一番重要な問いを入力してください。一番重要な問いというのは、文全体のテーマに関わる大きな問いです。それなしには文章が成り立たないような、全体を貫く柱となる問いです。

どれが大きな問いでどれが小さな問いなのかは、慣れないうちはなかなか判別できないかもしれませんが。そんな時はどれでもよいのでまずはとにかく欄を埋めてみてください。それが適切か否かは公式を埋めていく過程でみえてくるはずです。

プロセスを進めていく過程でどうも適切でないと感じた場合は、別の問いを入れて最初からやり直しましょう。

なお「なぜXなのか?」「Xの理由は何か?」のように、WHY（なぜ）による問いの場合、公式が若干変わります。WHYによる問いから始まる場合、「論説文WHY文用テンプレート」をお使いください。

4-3 答えの入力

次は答えの入力です。

第一ステップ 問いと答えを明確にして公式文を作成します

▼作文公式

1行目	<p>A: 明らかにしたい問いはなんですか?</p> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; min-height: 20px;">問いを簡潔に記入します。例：喜多方でオススメのラーメン屋といえば?</div>	は	
	<p>B: それに対する答えは?</p> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; min-height: 20px;">答えを簡潔に記入します。例：ラーメン『馬賊』だ。</div>	である	<div style="background-color: #ff0000; color: white; padding: 2px 5px; display: inline-block;">← 答えを入力します</div>
2行目	<p>C: その理由は何ですか?</p> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; min-height: 20px;">理由を簡潔に記入します。例：比内地鶏を長時間煮込んで作ったスープが絶妙。癖になる味。全国から客がやってくる。</div>	だからである	
3行目	<p>D: まとめると?</p> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px; min-height: 20px;">まとめとして書きたいこと（課題や感想等）を簡潔に記入します。例：行列ができているが並ぶだけの価値はある！</div>	だよ	

これはそれほど難しくはないはずです。問いが明確になっていれば普通、答えも明確になっているからです。というより答えがわからないテーマについて書くことなどそもそもありえないでしょう。

注意していただきたいのは、ここでいう答えというのは問いに対する実際の解決策ではなく、あなたの意見だということです。

そのため、実際の解決策がない問いに対する答えは「解決策はない」となります。この場合、解決策がないことを前提に、どうすればよいのか、などと論じることになります。

※正確にいうと、この場合、「どうすればよいのか」が文章全体の問いになるはずですが。つまり、この「どうすればよいのか」が「大きな問い」に相当し、解決策についてのそれは「小さな問い」に相当します。

なお例文では

ラーメン『馬賊』だ

が入っています。

4-4 理由を入力する

文章の基本形は、問いと答えです。したがってそのふたつがあればいおう文章としては成り立ちます。実際、それで十分な場合もあります。しかし、通常、それだけでは不十分です。なぜそのような答えになったのか、読者はその理由を知りたいと思うのが普通だからです。

そこで求められるのがこの「理由」の部分です。ここではなぜそのような答えになるのか、その理由を簡潔に記入します。

第一ステップ 問いと答えを明確にして公式文を作成します

▼作文公式

1行目	A: 明らかにしたい問いはなんですか？ 問いを簡潔に記入します。例：喜多方でオススメのラーメン屋といえば？	は
	B: それに対する答えは？ 答えを簡潔に記入します。例：ラーメン「馬賊」だ。	である
2行目	C: その理由は何ですか？ 理由を簡潔に記入します。例：比内地鶏を長時間煮込んで作ったスープが絶妙。癖になる味。全国から客がやってくる。	だからである
3行目	D: まとめて？ まとめとして書きたいこと（課題や感想等）を簡潔に記入します。例：行列ができているが並ぶだけの価値はある！	だよな

理由を入力します

ひとことで言えない場合も多いかと思いますが、ここでは抽象的・総論的な言葉でかまいませんので「～だから」とできるだけシンプルな形で記入してください。そうでないと、あとでアウトラインを組み立てる際、悩んでしまうことになります。

ここでは

比内地鶏を長時間煮込んで作ったスープが絶妙。癖になる味。全国から客がやってくる

と複数の理由をそのまま並べています。

なお理由が複数ある場合、「理由は以下の通りだ」で始め、それらを箇条書きで列挙する形でもかまいません。

たとえば、

理由は以下の通りだ。

- 1、 スープは比内地鶏を長時間煮込んで作った鶏ガラ系
- 2、 一度食べるとやみつきになる絶妙な味
- 3、 評判の味を求めて全国からラーメン通が集まってくる

といった形です。

4-5 まとめを考える

次はまとめです。

前段階までで文章としてはほぼ完成です。文章として言うべきことは基本的に言い尽くしてあるからです。ただし、読む側からするとそれでもやはり若干物足りないはずで

というのも、「要するにそれはどういうことだ?」とか「言いたいことは判った。で、君はそれに対してどう思っているんだ?」といった新たな疑問が浮かび上がってくるからです。そこで補足的に必要なものが、まとめです。

ここでは「問い」→「答え」→「理由」というそれまでの流れを受けて、「ということは～」もしくは「だから～」という形でまとめとなる文を入力してください。

第一ステップ 問いと答えを明確にして公式文を作成します

▼作文公式

1行目 A: 明らかにしたい問いはなんですか?

問いを簡潔に記入します。例: 喜多方でオススメのラーメン屋といえば?

は

B: それに対する答えは?

答えを簡潔に記入します。例: ラーメン『馬賊』だ。

である

2行目 C: その理由は何ですか?

理由を簡潔に記入します。例: 比内地鶏を長時間煮込んで作ったスープが絶妙。癖になる味。全国から客がやってくる。

だからである

3行目 D: まとめると?

まとめとして書きたいこと(課題や感想等)を簡潔に記入します。例: 行列ができているが並ぶだけの価値はある!

だよ

← まとめを入力します

まとめに入る内容としては、一般に「結論の再確認」「課題の明確化」「メリットの提示」「補足」「感想」「行動促進」「願望」などがあります。

例文では

行列ができているが並ぶだけの価値はある

とそのメリットを提示するとともに読者の行動を促す内容になっています。

以上で公式文は完成です。

5. 導入の作成

5-1 導入の必要性

次に導入を作成します

導入なしにいきなり問いから始めてもかまわないのですが、通常、何の話題なのかきちんと示さないと「え、いきなり何の話？」と読者をとまどわせてしまいます。

また読んでもらうには冒頭で読者の注目を集める必要もあります。

そのためたいの文章では、最初に読者の興味を引くような話題を持ってきて、そこから本題である問いへバトンタッチするというのが一般的です。

5-2 導入作成のヒント

しかしこの導入の作成は口でいうほど簡単ではありません。導入から問いへ、違和感なくスムーズに導くにはそれなりのテクニックが必要だからです。

多くの人が書き出しに悩むのはそのせいです。導入をどう書けばよいかわからないから書き出しに悩むのです。

では、どうしたらうまい導入が書けるようになるのでしょうか？

正直なところ、これに関しては私も模索中の段階です。「これで決まり！」といえるような決定的な法則は残念ながらまだ掴めておりません。

代わりにここでは、ひとつのヒントを提示してみたいと思います。

ベースになっている考え方は「問いを遡る」ということです。

5-3 主題作成のヒント

さて、その導入ですが、ここでは主題とその補足からなるものとして考えます。

図式で示せば、

導入＝主題＋主題補足

という形です。

第二ステップ 「導入」を作成します

▼ 導入

主題	主題 ：何について問題視しているのかその主題を簡潔に記入します。例：喜多方はラーメンの街である
主題補足	主題補足 ：その主題がどうしたのかを補足します。ここから「問い」が出てくるような流れでまとめます。 例：対人口比の店舗数では日本一のラーメン激戦区だ

ということで、まず主題を作成します。

ここで使用するのは「第二ステップ 導入を作成します」の「導入づくりのヒント」です。

導入づくりのヒント

導入に何を持ってくればよいかわからなくなった場合、問いからその前提を
「なぜ？」でもって順に遡っていくとふさわしい導入（主題とその補足）が見つかりやすくなります

問い

▼ why?

発端 1

まず第一ステップで明らかにした問いを再入力します。

問いは「喜多方でオススメのラーメン屋といえぽ？」でしたね。それを再入力してください。

次になぜそのような問いを発したのか、その前提は何かと遡って考えます。

導入づくりのヒント

導入に何を持ってくればよいかわからなくなった場合、問いからその前提を
「なぜ？」でもって順に遡っていくとふさわしい導入（主題とその補足）が見つかりやすくなります

問い

▼ why?

発端 1

その結果、そこには「店が多くて選ぶのに苦労するから（→オススメが知りたい）」という前提があるのに思い至りました。

さて、ここでその前提を吟味してみましょう。それが主題としてふさわしいか、また書き出しとして使えそうかという視点から検討するのです。

もしふさわしくないと考えた場合は、再びその前提を遡ってください。

※漠然と考えるのではなく積極的に情報収集をしながら考えてください。

問い	第一ステップの問いを再度記入します。例：喜多方でオススメのラーメン屋といえば？
	▼ why?
発端 1	なぜその問いが出てきたかを遡って考えます 例：店が多くて選ぶのに苦労するから（オススメが知りたい）
	▼ why?
発端 2	それはなぜなのか、さらに遡って考えます 例：喜多方は対人口比の店舗数で日本一だから（店が多い）

すると、「喜多方は対人口比の店舗数で日本一だから（→店が多い）」という前提に思い至りました。

ここでもう一度主題としてふさわしいかどうかを検討してください。核心に近づいてきたような気もしますが、それでも主題にするにはまだ物足りないし、書き出しにするのも難しいような気がします…。

そこでもう一度その前提は何かと遡ります。

発端 1	なぜその問いが出てきたかを遡って考えます 例：店が多くて選ぶのに苦労するから（オススメが知りたい）
	▼ why?
発端 2	それはなぜなのか、さらに遡って考えます 例：喜多方は対人口比の店舗数で日本一だから（店が多い）
	▼ why?
発端 3	同様にさらに遡って考えます 例：喜多方はラーメンの街である →例文の場合、これが主題になります

今度は「喜多方はラーメンの街である」という前提の存在に気づきました。

ん？ これなら主題としてもふさわしそうだし、なにより書き出しにもそのまま使えそうです…。

ということで、ここではこれを主題に持ってきました。

このように何度か前提を遡るうちに導入の主題となるものが見えてくるはずです。

それを主題に持ってくるというのがこの方法です。

ただし、この方法にはコツが必要です。

最初のうちは、どれが主題としてふさわしいのか見当がつかないかもしれません。が、まずはあたりをつけて欄を埋めてみてください。

試行錯誤を重ねるうち、どれを主題にもってくればよいのか、そのコツがだんだんわかってくるでしょう。

5-4 主題補足作成のヒント

次に主題補足です。これはそれほど難しくありません。通常、「前提」を逆にたどったものがそのまま主題補足になります。

例文でいえば

「喜多方は対人口比の店舗数で日本一だ」が「主題補足1」になり、
「店が多くて選ぶのに苦労する」が「主題補足2」になります。

導入づくりのヒント

導入に何を持ってくればよいかわからなくなった場合、問いからその前提を「なぜ？」でもって順に遡っていくとふさわしい導入（主題とその補足）が見つけやすくなります

問い

第一ステップの問いを再度記入します。例：喜多方でオススメのラーメン屋といえぼ？

▼ why?

発端 1

なぜその問いが出てきたかを遡って考えます 例：店が多くて選ぶのに苦労するから（オススメが知りたい）

▼ why?

発端 2

それはなぜなのか、さらに遡って考えます 例：喜多方は対人口比の店舗数で日本一だから（店が多い）

▼ why?

発端 3

同様にさらに遡って考えます 例：喜多方はラーメンの街である →例文の場合、これが主題になります

▼ why?

・

・

・

▼ why?

※主題としてふさわしいものが出てくるまでこの作業を繰り返します。
通常ここでの考察を逆転させると「主題→主題補足」の流れが出来上がります。

ここで「主題～主題補足～問い」までを順に並べてみてください。そしてそれを最初から読んでみて意味の流れがスムーズかどうかを確認してください。

例文では以下のような流れになります。

主題：喜多方はラーメンの街である

主題補足1：喜多方は対人口比の店舗数で日本一だ

主題補足2：だから店の数も多くて選ぶのに苦労する

問い：喜多方でオススメのラーメン屋といえば？

どうでしょうか？ それなりに意味が通るのではないのでしょうか？

ということで、ここではこの流れを採用することにします。

なお、意味の流れがスムーズでなかった場合、それは論理に無理がある証拠です。

その場合、もう一度ヒントに戻って同じ手順を繰り返してください。

論理に無理が生じたのは、おそらく遡る方向を間違ったからです。間違った方向に遡ったので間違った主題にたどり着いてしまったのです。

やり直す際は、遡る方向を少しずらしてみてください。

5-5 導入を作成する

以上をもとに実際に導入を作成してみましょう。

先ほどのヒントで探した主題と主題補足を入力してください。

第二ステップ 「導入」を作成します

▼ 導入

主題	主題：何について問題視しているのかその主題を簡潔に記入します。例：喜多方はラーメンの街である	← 主題を入力
主題補足	主題補足：その主題がどうしたのかを補足します。ここから「問い」が出てくるような流れでまとめます。例：対人口比の店舗数では日本一のラーメン激戦区だ	← 主題補足を入力

主題補足の欄にはヒントで出てきた主題補足 x を必要な分だけ順に入力してください。ただし全部を入れる必要はおそらくないでしょう。いくつかは省略しても意味が通るはずだからです。

例文では主題補足 2 はなくても意味がつながるので省略しました。

さて、これをもとに書き直したのが

喜多方はラーメンの街である。対人口比の店舗数では日本一のラーメン激戦区だ

という導入文です。

これに続いて

喜多方でオススメのラーメン屋といえば？

という問いが導かれることになります。

いかがでしょうか？ なんとかさまになったのではないのでしょうか？

5-6 導入作成は習うより慣れろで

この導入はなかなか厄介です。慣れないうちは適切な導入文がなかなか出てこないかと思います。

この導入部分についてももっと確実に正解が導き出せる公式を作りたいのですが、残念ながら現状ではそこまでの法則は発見できていません。

恐縮ですが、ここは習うより慣れろの精神で試行錯誤を繰り返してみてください。何度か繰り返しているうちにだんだんコツがわかってくるはずです。

6. 論証方法を考える

6-1 3つの論証方法

次は論証方法です。

ここは複雑な論理構造をもつ長文を書く際にお使いください。なお第一ステップで入力した「理由」でほぼ言い尽くされている場合、省略してもかまいません。目安としては1,000文字以内の文章であればたいがい不要です。

ここでは3通りの論証方法を示しました。

第三ステップ 論証方法を考えます

複雑な論理構造を持つ文章以外、ここは省略してもかまいません
およそ1000文字以下の文章では不要です

▼ 単純な理由列挙の場合

- 理由 1 例：比内地鶏を長時間煮込んで作った濃厚ながらもあっさりしたスープが絶妙
- 理由 2 例：やみつきになる味
- 理由 3 例：全国から客がやってくるほど評判が高い

▼ 演繹法の場合

- 前提 1 (AはCである等) 例：果物は植物である
- 前提 2 (BはAである等) 例：リンゴは果物である
- 結論 (BはCである等) 例：リンゴは植物である

▼ 帰納法の場合

- 事実 1 例：果物であるりんごは植物である
- 事実 2 例：果物であるみかんは植物である
- 結論 (複数の事実から導かれる共通点) 例：果物はすべて植物である

6-2 理由の列挙

ひとつ目は単純な理由の列挙です。

これは理由が複数あり、しかもそれらが並列関係にあるケースです。

例文では、

- 1、比内地鶏を長時間煮込んで作った濃厚ながらもあっさりしたスープが絶妙。
- 2、やみつきになる味。
- 3、全国から客がやってくるほどの評判。

となっています。

ここでは「ラーメン馬賊がなぜおすすめなのか？」に対して上記3つがそれぞれ独立した理由という形で並列に挙げられています。

6-3 演繹法

ふたつめは演繹法です

演繹法というのは普遍的な前提をもとに、より個別的な結論を引き出す推論方法です。といっても抽象的すぎてよくわからないかと思しますので、もう少し具体的な例を出してみましょう。

こういうものです。

最初に「果物は植物である」という誰もが認める大前提を提示します。

↓

ついで「リンゴは果物である」という小前提を提示します。

↓

そこから「(だから)リンゴは植物である」という結論を導きます。

これは演繹法の典型とされる三段論法による推論です。

記号で示すと次のようになります。

A=C

B=A

したがって B=C

ちなみにこの演繹法では前提が正しければ導かれる結論も必ず正しいものになります。

6-4 帰納法

次は帰納法です。

帰納法というのは、演繹法とは逆に個別的な前提をもとに普遍的な結論を引き出す推論方法です。

これも具体的な例で見てください。

次のようになります。

果物であるりんごは植物である

果物であるみかんは植物である

果物であるメロンは植物である

↓

したがって果物はすべて植物である

記号で示すと

A1 は X である。

A2 も X である。

したがって A は X である。

という形式になります。

注意しなければならないのは、この帰納法はそこから導かれる結論がおそらく正しいであろうという蓋然性を示すだけで、絶対的に正しいと証明するものではないことです。

そのため厳密な証明が必要とされる場合は演繹法と併用されることが多いようです。

以上が論証の流れです。

ただし論証方法にはこれ以外にもありますし、また実際の文章においてもぴったりあてはまるとはかぎりません。無理やり当てはめようとするとかえって混乱してしまうこともあるでしょう。

なので、ここではあくまで思考を整理するための参考ツール程度にお考えください。

7. アウトラインを作成する

7-1 アウトラインの書き出し

次はいよいよアウトラインの作成です。

といってもこれはそれほど難しいものではありません。基本的には前のステップで入力したものをそのまま、もしくは若干肉付けして再入力するだけだからです。

ただし、ここには若干のコツがあります。それは

- 主語と述語を明確にすること
- 一文一意とすること

です。

またその際、修飾語など枝葉の部分はできるだけ削ぎ落としてください。「AはBである」という形のシンプルな文にするのがポイントです。

こうすることで文の骨格が安定します。骨格が安定すればあとで肉付けする際、枝葉となる語句を付け加えてもねじれないわかりやすい文に仕上げることができます

なお前のステップで入力したものは自動的に反映されません。お手数ですが、コピー&ペーストなどでご対応いただければと思います。

さて指示通りに入力したら最後に「アウトラインを書き出す」を押してください。

まとめのヒント

まとめに何を持ってくればよいか迷った場合、お使いください。一般に「まとめ」には次のようなものが入ります。

結論の再確認→	結論を繰り返し、強調します 例：したがって喜多方に行った折にはぜひともラーメン馬賊を訪れてみてほしい。
課題の明確化→	課題を明確化し、今後の考察につなげます 例：ただし休日は長い行列なのでできれば平日に訪れた方がよいかもしれない。
メリットの提示→	得られるメリットを示します 例：連日行列ができていますが並ぶだけの価値はある！
アクション→	すべきことを訴えます 例：休日は餃子の半額サービスもあるそうだから今度の日曜日にでも訪れてみてはどうだろうか。
補足→	書き足りなかった部分を補います 例：ちなみに営業は朝7時から。地元では「朝ラーメン」が当たり前らしい。
感想→	個人的な感想を加えます 例：先日も食べたが相変わらず美味しかった。また絶対食べに行くぞ。
願望→	筆者の願望を示します 例：できれば市内にも支店を出してほしいものだ。

アウトラインを書き出す



そうするとアウトラインが表示されます。

これでいったん作業は完了です。

お疲れ様でした。

7-2 肉付けする

ここであらためてアウトラインを読んでみてください。

いかがでしょうか？

ぶつかりで表現もこなれていないかもしれませんが、いわんとすることの6割～8割は伝わる文章になっているのではないのでしょうか？

あとはそれを10割に近づけるだけです。そしてそのための作業が「肉付け」になります。

肉付けというのは、言葉を補ったり、別の言葉に変えたりして表現をブラッシュアップすることです。

どう肉付けするかは自由です。よりわかりやすい表現になるよう各自工夫しながら推敲を重ねてください。

なおここでは具体的な肉付け方法については触れません。文章の表現力を高めるノウハウ本はすでに数え切れないほど出版されていますし、ネット上にも同様のサイトがたくさんあるからです。

※正直いうと、表現力に関しては私もあまり自信がありません。少なくとも皆さんに教えられるほどの表現力は持ち合わせておりません。恐縮ではございますが、表現力を高める方法については出版物やネット上のサイトなどに当たっていただければと思います。なお巻末にオススメの参考書を紹介しましたので、そちらもご参照ください。

代わりに、ここでは肉付けする際のヒントだけ記しておきます。

肉付けの方法には大きく分けて次の二通りがあります。

1、表現を膨らませる

言葉を補い、よりわかりやすい表現に直します。とくに意味が伝わりにくかったり、誤解を招くような部分は言葉を尽くしてきちんと説明します。

ただし文章はシンプルイズベストです。表現を手直した結果、かえって短い文になったとしても簡潔にしてわかりやすいのであれば、それがベストです。無理に膨らませる必要はありません。

2. 情報を追加する

肉付けする一番簡単な方法は情報を追加することです。それらを必要に応じて追加してください。ただしいうまでもありませんが、追加する情報は論旨に沿ったものでなくてはなりません。たんに字数を膨らませる目的で無関係な情報を混ぜ込んでしまつては、論旨がわかりにくくなってしまいます。

また論旨に沿った情報であれば、それにふさわしい場所が必ずあるはずです。全体の論旨と前後の流れを確認しながら、ふさわしい箇所に追加してください。逆にふさわしい場所が見つからないのは、それが不要な情報である証拠です。そのような情報を無理に入れ込む必要はありません。

8. あとは練習あるのみ！

いかがでしたでしょうか？

使い方そのものは指示どおり空欄をうめていくだけですので、それほど難しくはなかったかと思います。もしかしたら例文のようなカンタンな文章であれば、今日からでもスラスラ書ける自信がついた方もいらっしゃるのではないのでしょうか？

けれど…。いうまでもありませんが文章作成は理屈だけのものではありません。それはむしろスポーツのような身体的技能に属するものであり、それを習得するためには一定の訓練期間が要求されます。

このテンプレートも同じです。このテンプレートの謳い文句は「コツ（暗黙知）を言語化し見える化した」というものですが、コツを頭で理解するのとそれを身体に覚えさせるのとはまた別の話です。

そのためこのテンプレートを使って実際にそれなりの完成度の文章が作れるようになるには、コツを頭で理解することに加え、それを身体に覚えさせる必要があります。そしてそのためには一定の訓練はどうしても欠かせません。

そこをお願いします。

これから文章を作成する際は必ずこのテンプレートを使ってください。テンプレートに頼らなくてもスラスラ書けそうな時でもできるだけそうしてください。ましてや何を書けばよいのかわからない時は必ずそうしてください。もちろん最初はどんな言葉を埋めればよいのか、まるで見当がつかないかもしれません。たとえ埋めたとしても的はずしてばかりかもしれません。

それでかまいません。習うより慣れろの精神で試行錯誤を重ねてみてください。そうしているうちに、やがて「あ、そういうことか！」と腑に落ちる瞬間が必ずやってきます。それがコツを体得した瞬間です。

そうなればしめたもの。そうなった暁にはあなたは間違いなく今より数段楽に文章が書けるようになっていくことでしょう。と同時にいままで心の奥底にこびりついてきた文章作成に対する苦手意識もどこかへ消えてしまっているはずです。

そして、これが重要なことですが、そう遠くない将来、あなたはこのテンプレートに頼らずとも、いつでも意のままに論旨の明快なわかりやすい文章を自由に紡ぎ出せる自分自身を発見することになるでしょう。

それがこのテンプレートがめざす最終的なゴールです。

そうなるまであとほんの少しです。それまで、もうしばらくの間、どうか辛抱してこのテンプレートとおつきあいください。

このテンプレートがあなたの文章力向上の一助となりますようにー。

「たかはし式三行作文術」テンプレートを を 使うためのコツ

●その1 公式文をきちんと作る

このテンプレートを有効活用するうえで最も重要なのは、公式文をきちんと作ることです。

すなわち

AはBである なぜならCだからである ということはDだよ

という公式文をできるだけ明快な論理で作り上げるということです。

その上でそれぞれの変数（ここでいう ABCD）をテンプレートに当てはめていきます。

A→問

B→答え

C→論証

D→まとめ

その後で、導入部分を考えます。

もちろん、導入部分を省略し、いきなり問いから始めてもかまいません。ただし、通常は糸口となる導入部分があった方が読みやすくなります。というのも、それがないと何について話しているのかすぐには理解できず、読み手が混乱してしまうからです。

とはいえ、持って回ったような導入部分はいただけません。回りくどい導入は読者を苛立たせるだけだからです。

導入部分は、問いという座敷へスムーズに導くための玄関にもたとえられます。気軽に入れるようできるだけ間口を広くし、そしてさらに奥へ入ってみたいと思わせるようなうまい仕掛けを考えてみてください。

●その2 公式文をうまく作るには？

公式文らしきものはできたけれど、それを展開しようとするとうまくいかない場合があります。原因の多くは公式文自体が不完全なためです。

公式文が不完全なのは多くの場合、次のいずれかのケースです。

1、問いが明確でない

ひとつは問いが曖昧で明確でないことです。問いがはっきりしなくてはうまく答えられないのは当然です。

問いが曖昧なのは、問題意識が明確でないせいです。まずは問題意識をはっきりさせ、そのうち何を一番問題視しているのか、何に一番疑問を持っているのかといった具合に問いを掘り下げながら、その核心となる問いを浮かび上がらせるようにするとよいでしょう。

2、論理的でない

もうひとつは公式文の流れが論理的でないことです。文のつながりが論理的な流れに沿っていなければ意味がわからなくなってしまいます。

このケースでは、問いが論理的でない場合と、答えが論理的でない場合の二つがあります。後者の場合、「AはBである」というシンプルな文にすることで、論理的かどうかは比較的簡単に見抜けます。二つを並べてAとBとの間に因果関係があるかどうかを確認すればよいのです。

しかし、問題は前者の問いが論理的でない場合です。これはなかなか厄介で、それなりの訓練を受けた学者であっても知らず知らずのうちに論理的でない「間違った」問いを作ってしまうことは少なくありません。この場合、「どこかに論理的な落とし穴がないだろうか？」という視点からもう一度問いを客観的に見直すようにしてみてください。

参考までに答えが論理的でないケースを挙げてみます。

こんな公式文です。

- A あれは何？
- B 熊だ
- C なぜならニャーと鳴くからだ
- D だから熊は可愛いよね

いうまでもなく、これは論理的に正しくありません。すなわち真実ではないということです。真実ではないのですから、いくら文法的に正しくても、説得力のある文章にはなりません。

もちろん小説などフィクションの場合はその限りではありません。

3、問いの詰め込みすぎ

公式文が不完全になってしまうもう一つの原因は、問いを詰め込みすぎているケースです。

文章というのは、突き詰めていけば問いに対する答えです。その問いと答えのユニットが一定の論理的法則の元に順序よく並べられて提示されるのが文章です。

そしてひとつの文章にはひとつの問いとひとつの答えというのが大原則です。文章を構成する基本単位である文も同様です。ひとつの文には必ずひとつの答えという原則を守らなければなりません。ひとつの文の中に二つも三つも問いがあってはわかりにくくなってしまふのは当たり前です。

したがって公式文がうまく展開できない場合、そこに複数の問いが混在している可能性があります。そうなっていないかどうか、もう一度確認してみてください。

ちなみに問いが複数混在してしまうのは、問いが大きすぎる場合が多いようです。大きな問いというのは通常、より小さな問いからなっています。大きな問いを扱う場合は、一度に答えを出そうとせず、いったん小さな問いに細分化してから、順序良く答えを出していくようにするとよいでしょう。

●その3 三行作文公式を実際の文にあてはめてみる

ここで、実際の文を三行作文公式にあてはめる練習をしてみましょう。

あてはめるのは次の文です。たまたま手元にある本の最初の見開きページに載っていた案内文をお借りしました。

大好評「直感」シリーズの第3冊目。今回はなんと、高校数学の超難所、微分積分にスポットを当てます。

ビブンセキブンなんてチンプンカンプン。そんな人たちのために、ハタムラ先生がひと肌脱ぎます。

「学校で教わる前に読んでおきたかった…」。そう思うこと間違いなしの本です。

さてこの案内文を以下の三行作文公式にあてはめてみます。

AはBである

その理由はCである

ということはDだね

最初は「AはBである」の部分です。これは「Aとは何か？」と「(その答えは)Bである」の部分に分けられることはすでにご説明しました。

そこでまずは「Aとは何か」の部分を探してみましょう。

しかし、みたところ問いの形式になっている表現はなさそうです…。

こういう場合、問いが裏に隠れていると考えるとよいでしょう。

そうして改めて眺めてみるとこんな問いが隠れていることがわかります。

「この本の概略は何か？」です。

次にその答えとなる部分を探してみましょう。

大好評「直感」シリーズの第3冊目。今回はなんと、高校数学の超難所、微分積分にスポットを当てます。

答えとなるのはここです。

このままでは少し分かりづらいので、問いに対応する答えの形式に直してみましょう。

この本は、大好評「直感」シリーズの第3冊目です。しかも今回はなんと、高校数学の超難所、微分積分にスポットを当てました。

あるいはもっとシンプルに言うならこんな感じでしょうか。

この本は、「直感」シリーズの第3冊目となる本で、今回のテーマは微分積分です。

ここまでの部分を問いと答えの形式に書き直してみましょう。

「この本の概略は何か？」

「『直感』シリーズの第3冊目となる本で、今回のテーマは微分積分である」

こう書き直すことができました。

次に行きましょう。「その理由はCである」の部分です。

理由となる部分を探してみましょう。…しかしここでも理由らしきものは見当たらないようです。こういう場合、「理由」というより「もっと詳しい説明」と置き換えて考えてみるとよいでしょう。

では、詳しい説明をしている部分はどこでしょうか？

ビブンセキブンなんてチンプンカンプン。そんな人たちのために、ハタムラ先生がひと肌脱ぎます。

ここですね。

真正面からの具体的な説明というわけではありませんが、いちおうの説明になっていることはおわかりいただけるかと思います。

さて次は最後の「ということはDだよ」の部分です。

これはどこに相当するのでしょうか？

「学校で教わる前に読んでおきたかった…」。そう思うこと間違いなしの本です。

ここです。その前に「こういう（わかりやすい）本です。だから…」という一文が隠れていると考えるとよりわかりやすいでしょう。

最後にこれをできるだけシンプルな公式文に戻してみます。

問い

「この本の概略は何か？」

答え

「『直感』シリーズの第3冊目となる本で、今回のテーマは微分積分である」

理由（説明）

「微分積分がチンプンカンプンな人たちのために、筆者がわかりやすく説明した」

まとめ

（だから）「学校で教わる前に読んでおきたかったと思うだろう」

以上、こうしたどこにでもありそうな文章も三行作文公式によって腑分けできることがご理解いただけたかと思います。

ツイッターにも応用可能です！

またこうした短い文にあてはめられることから判るように、この三行作文公式はツイッターなどの短文を書く際にも有効です。というより、公式文を140字以内で収めればそれがそのままツイッター用の文章になるはずで

●世界一カンタン(?)な小論文の書き方

小論文を書くのは難しくありません。といってもテーマが与えられたそれに限りませんが…。

要は、テーマについて自分がどう思うかを率直に書けばよいのです。極端な話、イエス、ノーだけでもよいのです。テーマについて自分なりの意見を述べるのが小論文である以上、「イエス」もしくは「ノー」という意見表明さえできればそれはもう立派な小論文にほかなりません。

はい、これが世界一カンタンな小論文の書き方です。終わりー。

いや、もちろん冗談です。

いうまでもなく、実際の小論文試験でただ一言「イエス」だけの回答をしたら点はもらえないでしょう。そこでもう少し工夫が必要になります。

どんな工夫でしょうか？ なぜ「イエス(ノー)」と思ったのか、その理由を述べることです。ただし、当たり前ですが、「そう思うからそう思ったんだ」ではダメです。小論文というのは、論理的思考力を測るための問題でもあります。したがってそこには論理的な筋道がきちんと通っていなければなりません。

筋道を立てて述べるのが難しければ、なぜそう思うのか理由を列挙するだけでもかまわないでしょう。ひとつめはなにになに、ふたつめはなにになに…というやりかたです。もちろん、理由を列挙するにも論理的思考力が要求されますが、それでも慣れない人にしてみればその方が簡単なはずです。

つまり、与えられたテーマについて「自分はこう思う」を述べた後、「なぜならこうだからだ」と理由を列挙すればよいのです。そうすれば、とりあえず小論文の最低限の形式を満たすことができます。さらに自分なりの考察や感想をそこに付け加えれば、それはもう立派な小論文といつてよいでしょう。

こう考えれば小論文、恐るるに足らず、なのではないでしょうか。というより小論文に対して尻込みしてしまうのは、それを何かとんでもなく複雑怪奇なものと思えるからかもしれません。小論文とは何か？ それは突き詰めて言えば、問いと答えにすぎないのです。

幽霊の正体見たり枯れ尾花という言葉がありますが、何かに苦手意識がある人はそれを実際以上に誇張して考える傾向があります。そうした苦手意識を払拭するには、それを意識的に単純化し、矮小化するのもひとつの方便ではないでしょうか。

P.S.

ここからも解るように、あらかじめテーマ(問い)が与えられた文章を書くのはそれほど難しくありません。むしろ難しいのは問い(テーマ)を立てることです。つまり文章を書く上で最大のハードルは、この問いの立て方にあるということです。このテンプレートではその問いの立て方を中心に縷々述べております。

●書く気のスイッチを入れるには？

文章が苦手という人の中には、原稿用紙を前にインスピレーションが湧いてくるのをただひたすら待つだけという人も多いようです。

そのうち素晴らしい天啓が降りてきて、憑かれたように書きはじめ、気がつけば文豪をもうなせる名文がいつまにか完成していた――。そんな奇跡的などんでん返しを期待しているのかもしれませんが。

しかしながら漫然と待っていてもそのような天啓が降りてくるとはかぎりません。場合によっては何日も、あるいは何ヶ月待ってもそうならないことだってあります。締め切りがない人であれば、もちろんそれで構わないでしょう。しかし、そうでない人はこれでは困ります。

では、どうしたらよいのでしょうか？

天啓を人為的に降ろすより他にないでしょう。

――天啓を人為的に降ろす？

でもどうやって…？

じつは天啓なるものの正体はといえば、「問い」なのです。「なぜ？」「どうして？」というあの問いです。

人の頭脳が働き始めるのは、何かに疑問を持った時です。「なぜ？」「どうして？」という疑問が生じた時、思考のエンジンがかかるのです。じつのところ天啓が降りたと感じるのは、思考のエンジンがかかり始めたことを感知した時に生じる脳内の感覚でもあるのです。

人間の頭脳というのは、目の前になんらかの疑問があるとそれに答えを出さないと落ち着かないようにできています。疑問というのは理解不能な状況です。それはもしかしたら生存を脅かす重大な危機かもしれません。そのため、人間の頭脳というのは目の前に問いを与えられると、自然な生体反応としてそれに対する答えを出すようプログラミングされているのです。そればかりでなく、その答えを出さないうちは機能を停止しないようにつくられているのです。

…ということは。

そうです。

意識的に問いを立てることによって、天啓を降ろすことができるということです。

すなわち天啓とかインスピレーションとか呼ばれるものは、きちんとした問いを立てることによって人為的に呼び込むことができるのです。

ただし問いの立て方にもコツがあります。

たとえば、今現在、与えられたテーマでのレポートの課題を前に、何をどう書こうかアイデアが浮かばなくて行き詰まっている、という人も多いのではないのでしょうか。

テーマ（問い）を与えられているのになぜアイデアが浮かばないのでしょうか？

それはそのテーマを自分自身の問いとして正面から受け止めていないからです。どこか他人事の問題として距離をおいてみているからです。

自分自身に関連する切羽詰まった問題でなければ、当然ながら危険を回避する最適解を探し出すという脳の生体反応は生じません。

（いうまでもありませんが、課題を提出しないと落第するしないといった意味ではありません。あくまで課題であるテーマ（問い）に対して自分なりにそれをどう受け止めるかという意味です）。

たとえば極端な例ですが、なんらかの濡れ衣を着せられ、警察に取り調べを受けていると想像してみてください。

もちろんあなたは非難されるようなことは一切していません。

そんな時、あなたはどうしますか？

おそらく普段いかに無口な人であろうと「自分はそんなことしていない。無実だ！」と言葉を尽くして、訴えるはずです。場合によっては、普段の姿からは想像もつかないようなマシンガントークでもって何時間も語り続けるのではないのでしょうか。

ここから分かるように問いを立てるコツも、そういう自分に関わる切羽詰まった状態に自らを追い込むことにあります。

つまり、「自分ごと」の状態になるよう問いを自分の方に引き寄せ、その視点から新たに問いを再定義するということです。

そうすれば、インスピレーションというのはいやがおうにも必ず湧いてきます。

今現在、どうもいいアイデアが浮かばない、という人は、まず問いを明確にしてみてください。そして「自分ごと」として受け止められるよう、その視点をずらしたり、部分拡大したりしてそれを再定義してみてください。

その再定義した問いが自分ごととしてかっちはまれば、その瞬間、脳内のスイッチが入ります。そうなればあとはもう時間の問題です。早い遅いはあれどやがて天啓が降りてくることでしょう。そしてそうなればあなたはそれを文章化するなり、何らかの形で表現せずにはいられなくなることでしょう。それが書く気のスイッチが入るということです。

このように問いを明確にすることは、文章の組み立てをしっかりとさせるために不可欠であるばかりでなく、何をどう書くべきかというインスピレーションを得たり、また書く気のスイッチを入れたりする上でも重要です。すなわち、文章を作る上で最も重要なポイントは何か、といえば、それは問いを明確にすること、なのです。



しつこいようですが..。

文章作成における最大のコツは、

発想においても、組み立てにおいても、

問いを明確にする！

これに尽きます。

おまけ

崖っぷちライターだった私を救ってくれた文章ノウハウ本

どういう運命のいたずらか、マスコミ業界に潜りこみライターの肩書きを得たものの小学生並みの文章しか書けず、失業の瀬戸際にあったかつての私。その危機から奇跡的に救い出してくれた効果観面の文章ノウハウ本をご紹介します。

1、『日本語の作文技術』



→<https://amzn.to/39Sa8Em>

初版は1976年とかなり古い本ですが、最近、改訂出版されたことからわかるように有名文学者以外による文章読本としては異例のロングセラーを記録している本であり、名実ともに名著といっても過言ではないと思います。

私も若い頃、これを読んで目からウロコだったのを思い出します。

とくに印象的だったのは修飾語の並べ方に関する部分です。たとえばこんなくだりです。

- 1、Aは私がふるえるほど大嫌いなBを私の親友のCに紹介した。
- 2、Aが私の親友のCに私がふるえるほど大嫌いなBを紹介した。
- 3、私がふるえるほど大嫌いなBをAが私の親友のCに紹介した。

4、私がふるえるほど大嫌いなBを私の親友のCにAが紹介した。

5、私の親友のCにAが私がふるえるほど大嫌いなBを紹介した。

6、私の親友のCに私がふるえるほど大嫌いなBをAが紹介した。

このうちどれがもっともわかりやすい文章であるかが詳しく説明してあるのですが、それがまた徹底して論理的かつ分析的なんですね。

自らのセンスのなさを棚にあげて「文章なんて要はセンスじゃん」とたかをくくり、それまで修飾語の並べ方など意にも介さなかった私にとって、この本との出会いはまさに天地がひっくりかえるような衝撃的な「事件」でした。

2、『レポートの組み立て方』

2冊目は『レポートの組み立て方』（木下是雄／ちくま学芸文庫）です。



→<https://amzn.to/2QxcLUb>

この本は、ややもすると曖昧になりがちな日本語表現をどうすればより明晰なものにできるかという問題意識をもつ理系の学者が、そのためのノウハウをわかりやすく解き明かしたものです。

同じ著者が書いたものに『理科系の作文技術』というベストセラーがありますが、この本はそれを文科系の学生や一般社会人向けに編集しなおしたものです。

ここには、書く上での心構えから材料集め、文章表現の仕方、さらに原稿用紙の使い方まで、レポートを書く上で必要なことは網羅してあるのですが、なかでも個人的に役に立ったのが「目標規定文」のくだりです。

目標規定文というのは、書きたいこと（主題）を短い文、またはごく短い文章にまとめたもので、これから書く文章は何を目標としているのか、そこで何を主張しようとしているのかをあらかじめ明文化しておくというものです。

具体的には次のような文章です。

このレポートでは、国産米は他国米と生産コストにおいて太刀打ちできるはずがないことを明らかにし、日本もコメ農業の将来計画はこのことを前提として立案するほかないことを主張する。

このレポートでは、同一労働同一賃金の原則をみとめる以上、男女平等と女性保護とは相容れないことを論証し、この二つを両立させるためには、保護施策のために生まれる男女間の賃金格差を国家が補償するほかないことを主張する。

またなぜ目標規定文が必要なのか、そのメリットとして本書では次のふたつが挙げられています。

- 1) 一字一句吟味しながら簡潔な目標規定文を仕上げることは、主題—レポートのエッセンス—を明確化するのに役立つ
- 2) 目標規定文と照らし合わせながら資料を探索・取捨選択し、またレポートの構成を検討することによって、レポートがすっきりと筋のおったものになる

この目標規定文という考え方に会ったこともまた自分にとって目からウロコの体験でした。

というのも、それまでの私は断片的なアイデアがひらめいた時点で舞い上がり、いきなり書き始めてしまうという悪い癖があったからです。

しかし、ゴールとなる結論すらみえてないままやみくもに書き始めても、道に迷わずゴールにたどり着けるとはかぎりません。当然ながら途中で脱線し、それ以上何を書けばよいのかわからず、にっちもさっちもいかないような状態に陥ってしまうこともしばしばでした。

けれど最初にこの目標規定文を書いておけば、もうそんな心配は無用です。もし途中で道に迷いそうになったら、この目標規定文を見直せばよいからです。そうすれば正しい道がどこにあるかがすぐに確認

できますし、それに沿ってふたたび筆を進めていけば、迷うことなくゴールまでたどりつけることができますというわけです。

じつをいえば、私が三行作文術を発想したきっかけとなったのもこの目標規定文という考え方でした。もしこの本と出会っていなかったら、おそらくたかはし式三行作文術も世に出ていなかっただろうと思います。そしてもちろん崖っぷちライターだった自分もとうの昔に谷底に落ちていたことでしょう。その意味でこの本と著者の木下是雄氏には、今もなおいくらそうしてもしたりないほどに感謝しています。

3、『文章力の基本』

次にご紹介したいのは『文章力の基本』（阿部紘久／日本実業出版社）です。



→<https://amzn.to/2T4MVsq>

これは誰もが気づかずにやってしまうミス为例文と改善案という二段構成でわかりやすく説明した本です。文章を書く上で必要最低限のルールがまんべんなく、しかも簡潔にまとまっており、個人的には初心者向けであればこれ一冊で十分ではないかと思うくらいです。

内容を目次から拾うと次の通りです。

第一章 短く書く

第二章 自然な正しい表現で書く

第三章 言いたいことを明確にする

第四章 分かりやすく書く

第五章 簡潔に書く

第六章 共感を呼ぶように書く

第七章 表記とレイアウトにも心を配る

どの章も実践的で役に立つノウハウがつまっているのですが、個人的にもっとも勉強になったのは第二章の「自然な正しい表現で書く」です。

なかでも役に立ったのは、「文の後半と前半をかみ合わせる」です。たとえばこんな例文が示されています。

(原文) この報道は明らかに、加害者だと疑われた人の人権が損なわれている。

(改善) この報道は明らかに、加害者だと疑われた人の人権を損なっている。

(原文) お客様から受ける質問には、正確な返答でなければならない。

(改善) お客様から受ける質問には、正確な返答をしなければならない。

ちょっとしたテニヲハの違いですが、文章上達のためにはこういった小さなミスも見逃さない目をもつことが大切です。書き終えた後、どうもしっくりこない表現だなど思っても、具体的にどこがおかしいのかが分からなければ改善のしようがないからです。

私もこの本で、テニヲハの使い方がまったくなくなっていないことを嫌というほど痛感させられました。

ネットにはテニヲハのおかしな文があふれています。日常的にそういう文に接していると、こちらの言語感覚もいつのまにかおかしくなってしまいます。それを防ぐため、私はいまも暇をみてはこの本を開いて自分の中のテニヲハ感覚を修正するようにしています。

4、『日本語てにをはルール』

最後は『日本語てにをはルール』（石黒圭／すばる舎）です。



→<https://amzn.to/2QzUXYF>

上でご紹介した『文章力の基本』でテニヲハの使い方がまるでなっていないことを思い知らされた私が、捲土重来をはかるべく買い求めたのがこの本です。

この本では、タイトル通り、とくに「テニヲハ」の使い方と文の組み立て方が重点的に解説してあります。

また『文章力の基本』同様、最初に例題を示し、それを読者に解いてもらってから答えを解説するというスタイルになっています。

以下はそうした例題のひとつです。

(1) 太郎が 花子に 絵葉書を 送った。

(2) 太郎は 花子に 絵葉書を 送った。

(3) 絵葉書は 太郎が 花子に 送った。

(4) 花子は 太郎が 絵葉書を 送った。

意味的にはほとんど同じですが、ニュアンスは微妙に違います。この本では、そのニュアンスの違いをテニヲハという視点からていねいに解説しています。

またこんな例題もあります。

(1) この電車の止まる駅は、鷺ノ宮、上石神井、田無、所沢に止まります。

(2) 次のニュースは、パンダの赤ちゃんが産まれたニュースです。

(3) 彼女が好きなのは猫です。でも、僕は犬です。

(4) この薬は、よく眠れますよ。

このなかに主語と述語の対応がずれていない文が一つだけあるのですが、それはどの文でしょうか、という設問です。

これは『文章力の基本』にもあった主一述の対応のずれを問うものですが、いわゆる「うなぎ文」や「こんにやく文」もまじっているので、ちょっと混乱してしまう人も多いかもしれません。ちなみに正解は(2)です。一定レベル以上、日本語文法に精通した人以外、とくになまかじりの初学者にとっては難問とっていい設問かと思います。

せっかくですので、もうひとつご紹介しておきましょう。

(1) 僕は兄貴のように夜遅くまで起きていない。

(2) 高価なダイヤモンドは直美には買えないだろう。

(3) 高橋は優しくて気が利くと言っていた。

(4) 窓のすぐそばの、メガネをかけている人が綾さんですよ。

(5) 良夫は夏休みの宿題を全部やった。

このなかで二つの意味には解釈できない(あいまいな表現ではない)文はどれでしょう、という設問です。これは一つの文が二つの意味に解釈できる「あいまい文」に関する設問です。これも私にとってはけっこうな難問でした。

わかりやすい文章を書くためには、一文一文をわかりやすい表現にする必要があります。一方、すべてわかった上で書いている本人にしてみれば、どこがわかりにくいのか自分で気づくことは案外難しいものです。しかし、これを裏返せば、文章上達の鍵はわかりにくい表現を検出するセンサーを磨くことにあるともいえるでしょう。そうしたセンサーを磨く上でこの本は自信をもっておすすめできる一冊です。

P.S.

『悪文』岩淵 悦太郎 (著)もオススメです。